

Title	<書評> 宮川敬之『和辻哲郎-人格から問柄へ』
Author(s)	劉, 静瑜
Citation	年報人間科学. 31 P.107-P.112
Issue Date	2010
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/5770
DOI	10.18910/5770
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

宮川敬之
『和辻哲郎—人格から問柄へ』

劉 静瑜

本書の副題は「人格から問柄へ」と付けられている。和辻哲郎（1889-1960）の後期思想は「問柄」を機軸として展開される。当然、このような思索は後期になって始められたようなものではない。しかし、前期において、どのようなかたちであらわれていたのかは理解しがたいものであった。それは、やはり和辻の前期思想の解釈においてはその人格主義を前面に押し出す傾向の方が根強かつたからである。もう一つの原因は、和辻自身の研究範囲の広範さにある。本書の著者宮川敬之は、『もの』と『こと』との引きはなし」を二つの手がかりとして、和辻哲学の前期から後期までの変遷を解説した。著者の指摘のなかでも特に重要な点は、仏教哲学研究の時期において、どのような人格観の変容が潜んでいるのかを、はっきりとした線をつないだことにある。

和辻哲郎は『人間の学としての倫理学』（1934）、『風土』（1935）『倫理学』（1937-1949）などの著作でよく知られている。和辻の『人間の学としての倫理学』では、まず人間の学としての倫理学の立場が述べられ、そして、西洋哲学史における重要な倫理思想が検討されたあと、和辻自身の倫理思想について解説される。和辻によると、人間存在はたんなる個人存在ではなく、問柄である。和辻は『倫理学』において、西洋哲学を支えてきた個人主義的人間観を批判した。そして、次のように述べている。

人間とは「世の中」であるとともにその世の中における（個人としての）「人」である。だからそれは単なる「人」ではないとともにまた単なる「社会」でもない。ここに人間の二重性格の弁証法的統一

が見られる。人間が人である限りそれは個人としてあくまでも社会と異なる。それは社会でないから個人であるのである。従ってまた個人は他の個人と全然共同でない。自他は絶対に他者である。しかも人間は世の中である限りあくまでも人と人との共同態であり社会であって孤立的な人ではない。それは孤立的な人でないからこそ人間なのである。従って相互に絶対に他者であるところの自他がそれにもかかわらず共同的存在において一つになる。社会と根本的に異なる個人が、しかも社会の中に消える。人間はかくのごとき対立的なるものの統一である。この弁証法的な構造を見ずしては人間の本質は理解せられない。¹⁾

和辻の考えでは、人間の本質をなすのは個々人に内在する意識ではなく、「実践」の上での人と人の「間柄」なのである。個人が何かを考え、また考える自己を意識する前に、それはすでに他者との「実践的連関」にある。そして、間柄においては、個人が社会から分離し、社会が個人を束縛する相互の否定運動がつねに動いている。個人も社会も、この「弁証法的な構造」によって存立しているのであり、人間は個人性と社会性の二重性格を持つといえる。

しかし、和辻は最初のころから、間柄としての人間存在を主張したのではないのである。『偶像再興』(1918)の時期における和辻は、阿部次郎の影響の下で、人格とは「精神、統一的自我、個体、叡知的性格」によって特徴づけられるものとしていたと考えられる。それらはまず、個人的な内面性に関する特徴であった。こうした人格主義は外在的な物質を追

求することを抑制し、この内部的な人格の成長と発展こそ至上の価値とする立場であるとされる。また、和辻は『偶像再興』においてつぎのように述べている。

生命全体の活動が旺盛となり、人格価値が著しく高まって来ると、そこにこの沸騰せる生命を永遠の形に於て表現しやうとする衝動が伴ふ。あらゆる形象と心霊、官能と情緒、運動と思想、——総てが象徴としてこの表現のためには使役される。そこに芸術家特有の創作が始まるのである。²⁾

こうした人格は、『偶像再興』において妊娠と産出の比喩で語られた内生とは、おそらく同様のものだと考えられる。和辻は内生と表現との関係は、生まれたものとその産出なのだとし記している。「生まれたものに対する極度の誠実と愛と配慮」、「生まれた物に対する正直と愛」、そうした内生の充実についての配慮こそが、表現⇨産出にはなにより必要なものと主張する。しかし、一九三五年に発表された論考「面とペルソナ」では、別の人格観が示されている。和辻はまず、顔が人の存在にとっていかに中心的地位を持つかを語り、顔とは人の存在にとって核心的な意義を持つもの、単なる肉体の一部ではなく、肉体全部を従える主体的なるものの座、すなわち人格の座にあるものにほかならない、と述べる。したがって、顔を抽象化したものが「面」である。「人格」の原語であるラテン語ペルソナとは、もともと劇に用いられる仮面のことであった。仮面の意であるペルソナが、劇中の役割、劇中の人物を示す意

味へと転じ、さらに日常における我・汝・彼という役割、社会における地位・身分・資格などの意に転じて、最終的に行為の主体・権利の主体としての「人格」の意味に帰着したのだ、と和辻は分析している。

そして、「仮面としてのペルソナは、一人称、二人称、三人称などと、特定の位格や人称としての限定を受ける前に、……その時代その社会の人間の生存の場の分節の体系、いいかえれば〈関係の束〉や〈柄の束〉の構成のかたどり」であると和辻は言っている。こうして、「仮面としてのペルソナ」は、「主語的同一性」ではなく、「関係の束」や「柄の束」を示すものであることがわかる。これは、和辻哲郎の人格観の変容の具合を端的に示しているといえるだろう。つまり、和辻の人格観は、『偶像再興』時には、「主語的同一性」ときわめて個人的な内面性としての人格であったのだが、論考「面とペルソナ」時には「関係の束」としての人格へと反転し、変容していたのである。

ここでは、その思想や書き方の変容に関して、本書の著者は、和辻の「第二子の喪失」という出来事の重要性を主張する。和辻の第二子は死産だった。一九一九年のことである。このことから現行の和辻全集の年譜に載せられることはない。また和辻自身による言及もほとんどなかった。むしろ、忘れようと努めた分だけ、抑圧されたかたちで以降の思考にも影響したと考えられる。

和辻が一九二〇年に刊行した『日本古代文化』の初版の序文に、「亡き児の霊前に捧ぐ」という献辞が書かれている。その内容とは、和辻が「一人の人間の死」によって呼び起こされた仏教への驚異が、さらに飛鳥奈良朝仏教美術への驚嘆となり、こうした美術を生み出した古代日本人を

知りたいと考え、仏教流入以前の日本文化の真相究明へと進んだ、と述べられている。ここで言及された「一人の人間の死」というのは、通常一九一六年に義父の高瀬三郎の病死と理解される³⁾。しかし、著者はこの言葉は、一九一九年に第二子の死産を指すことを主張する。

『日本古代文化』の序文だけではなく、『日本精神史研究』の論考「仏像の相好についての一考察」においても、喪われた第二子の影響の形が見て取れ、さらには和辻の思考とのつながりを持ち始める様子を捉えることができる。

ところで我々は、仏像や菩薩において嬰兒の再現を見るのではなく、作家が描らえたのは嬰兒そのものの美しさではなくして、嬰兒に現われた人体の美しさである。それによって彼は、「嬰兒」ではなくして「仏」や「菩薩」を表現する。従って、仏菩薩像は、いかに嬰兒の美しさを生かしているとはいえ、決して嬰兒を印象しはしない。宇宙の根元的原理であるところの法の姿、その神聖さ、清浄さ、威厳、威力——総じて嬰兒の持たざる深き内容こそ、ここに現われようとしているものなのである。すなわち仏菩薩像の作家は嬰兒を通じて仏菩薩像を現わそうとした⁴⁾。

この記述の中で、和辻は「嬰兒そのものの美しさ」と、「嬰兒に現われた人体の美しさ」の両者を引き離そうとして、それぞれを別々のなにかとして扱う。それは、現実では不可分であるはずの「もの」と「こと」である。そして、表現された「もの」としての嬰兒(嬰兒そのもの)と表現

された「こと」としての嬰兒(嬰兒に現われた人体)とを引きはがすということである。したがって、「こと」と「もの」との引きはがしは言葉、あるいは表現の問題であり、同時に人格の問題であると考えられている。⁽⁶⁾

「こと」と「もの」との引きはがしは人格の問題において、さらに一九一二年から連載される「入宋求法の沙門道元」の文章、そして一九二七年の博士学位論文『原始仏教の実践哲学』から考察することができる。これらの研究は、もともと日本文化史研究の延長として、日本仏教からインド仏教への歴史的な探求から始まったものである。それを同時代の仏教学者や宇井伯寿による研究業績を参照しつつ、ゴータマ・ブツダからアビダルマ仏教、さらに大乘仏教の中観派・唯識派に至る理論史を通観する試みである。まず、和辻は仏教哲学における五蘊の法を、われわれが日常生活において現象世界を知覚する際、その経験を可能にする範疇として理解する。五蘊とは、「五つの要素の集まり」の意味であり、われわれ個人の存在を構成する色・受・想・行・識の五つの要素のことである。「色」とは肉体、身体のこと、「受」は感覚もしくは感受作用、「想」とは表象作用すなわち想像すること、あるいは観念をいだくこと、「行」とは意志あるいは衝動的欲求のこと、「識」とは認識作用あるいは判断のことであるとされる。五蘊はまずわれわれの認識の世界を対象にする。しかし、五蘊は存在するものではなく、存在の法のことである。五蘊説は実体の要素の集積などではなく、あくまで範疇論である。この点の強調こそが和辻の五蘊説解説の特徴であった。したがって、和辻は五蘊説によって、一切の「われ」、「わが」が抜き去られ、無我論が示されると解説する。

かくて無我の法は二つのことを明らかにする。(一)、もし我を超感覺的超越的主観と考へるならば、それは我々の認識し得る世界には存在せぬ。超感覺的形而上学的なるものは認識の領域から閉め出される。(二)、もし我を経験的認識主観と考へるならば、それは我ではなくして五蘊に過ぎぬ。従って主観客観は撥無されてただ五蘊のみがある。⁽⁶⁾

以上の解説のように、和辻は認識—存在における五種類の「法」を提示し、経験我における「われ」、「わが」を五つの法によって解体した。しかし、五蘊説だけでは、まだ自我は解体しない。それは「我」を否定しただけであり、「我」に代わるものを提示できていないからである。五蘊説の不十分さの補填が縁起説の課題である。和辻はさらに縁起説を解説した。縁起説で問題にされたのは、複数の法の関係付けの仕方である。したがって重要なのは、和辻は縁起説が無我論を大前提とする問題展開であると考えている点である。和辻は、「主格を抜き去った法を考へ、その法の条件を追求するのが縁起説の立場である」と考える。このようにして和辻は、五蘊説および縁起説を無我論によって一貫して説明した。和辻は原始仏教研究を行いながら、表現—人格の問題関心を並行させているのである。和辻は大乘仏教、中観派の祖である竜樹の「我空法空」論を検討するにあたり、マックス・シェーラーにおける人格論を参照した。シェーラーは『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』において、人格を「作用(Akt)の統一」として提出した。シェーラーによれ

ば、人格(Person)は、一個の経験的存在のように自覚される自我(Ego)とは区別される。また同時に、各人の個性を排除した普遍的な理性意志である「理性人格」とも異なる。人格は、意識において具体的に経験されるが、決して対象とならないさまざまな「作用の統一」なのである。そして、和辻はこのシェーラーの見解を受け、人格主義のモデルとみなされるリップスの人格論を批判することになる。

しかしながら、この時期の和辻の人格観はリップスからシェーラーのものに移行し、さらにシェーラーも見過ごしている「統一」の問題を取り出して注目するように変容した。原始仏教研究において、個人的な内面性としての人格概念が完全に払拭される。いいかえれば、「主格が抜き去り」をされた人格、すなわち無我論の考察として、「もの」性を剥ぎ取られた「こと」が見出される。主格が抜き去られた人格が、人格として成立するのは「統一」の作用である。この時期の和辻における人格についての考えは、「こと」の一極的なものでしかなかったといえる。

このような人格観をさらに変容させたのは、和辻がドイツ留学した後
の思索である。和辻は西田幾多郎や田辺元などの触発によって、ハイデッ
ガーの考えに注目した。ハイデッガーから受けた影響とは、ハイデッ
ガーの道具についての分析、つまり「もの」への分析の仕方である。この分
析の仕方こそが、和辻に「もの」の延長としての風土性という問題を気
づかせる。したがって、かつて排斥していた「もの」性が和辻の認識に
おいて恢復され、「もの」と「こと」の二重構造が作られることになった。
そして、この日本における存在理解は、さらなる倫理学へとつないだ重
要なステップである。

本書の著者は、和辻の「第二子の喪失」ということから気づき、こ
のできごとによって、「こと」と「もの」、そして表現と人格の問題へと
つながると試みた。和辻の著作はさまざまな領域をわたっている。『日
本古代文化』、『日本精神史研究』、『日本倫理思想史』、『歌舞伎と操り浄
瑠璃』などの文化史的・精神史的な仕事があり、『倫理学』などの思想的・
体系的な研究もある。また、日本の文化史・精神史の根底には仏教的伝
統があると気づき、『原始仏教の哲学』という著作があらわれた。しかし、
なんの前提もなく、これらの幅広い著作を読むことは、読者のわれわれ
にとつて容易ではない。「第二子の喪失」ということがどれほど和
辻に影響を及ぼしたのかは、確かに証拠に乏しい。しかしながら、この
ことからよつて「もの」と「こと」とを引きはなそうとする思索の展開
がもたらされたという、本書の著者が提示した仮説は、和辻思想を理解
するにあたって、一つの有力な手がかりになると考えられる。

註

- (1) 和辻哲郎 『和辻哲郎全集』第十卷 岩波書店 一九九一年 一八頁。
- (2) 和辻哲郎 『偶像再興』初版 岩波書店 一九一八年 三三二頁。
- (3) 荻部直は 『光の領国』(創文社一九九五年)のなかで、「一人の人間の死」
を和辻の義父の高瀬三郎と推察している。
- (4) 『和辻哲郎全集』第四卷 四六頁。
- (5) 『和辻哲郎 人格から問柄へ』二三頁及び四一頁。
- (6) 和辻哲郎 『原始仏教の実践哲学』初版 岩波書店 一九六一年 一七六頁。

